

血液透析導入に対する不安への支援

Nursing support for induction of hemodialysis

東7階病棟

三村千代美 玉井佑季 永瀬拓也 茅野郁子 中西美佐穂

〈要旨〉A病棟では、血液透析導入患者に関わる機会があり、患者が安心して透析導入できるように関わっている。しかし、患者が血液透析について、より理解できるように事前に透析室見学を行うことはしていなかった。今回、血液透析に対する不安が強い患者に対し透析室の見学を提案し実施したところ、不安が軽減され、安心して透析導入できた事例があった。そこで透析導入に対してどのような不安や、それに対する支援があるのかを知るために文献検索を行い明らかにした。その結果、透析導入時の不安として、透析の際の体調の変化、穿刺痛などがあることがわかった。不安の原因としては情報の過不足があり、透析室の見学をする事で情報を得る事ができ、不安が軽減されること、また、不安に対して、患者の思いを傾聴していく関わりが大切であることが明らかになった。

キーワード：血液透析，不安，透析室見学

I. はじめに

近年生活習慣病に伴い慢性腎臓病が増加傾向にある。腎臓病の治療法は食事療法・薬物療法などがあるが、それらの治療では改善が見られず、末期の尿毒症状態となると、治療の選択肢は透析療法・腎移植となる。透析療法は血液透析と腹膜透析があるが、緊急時は血液透析が選択される。

A病棟では血液透析導入患者の入院が年間約40名ある。血液透析ではシャントの作成が必要であり、シャント作成後は患者に管理方法の指導を行っている。また、血液透析を開始する患者には、透析によって出現する可能性がある不均衡症候群などを説明し、患者が血液透析について理解して導入できるように関わっている。このように血液透析までに十分に指導できる患者もいれば、腎機能の急激な悪化により緊急で透析が必要になる患者もある。そのような場合には、透析導入に対しての不安があっても治療の必要性から導入せざるを得ない現状がある。

今回、緊急で血液透析を導入しなくてはならない患者が強い不安をもっていた。そこで、透析室の見学を提案し実施したところ、不安が軽減され、安心して透析導入できた事例があった。この事例から、透析導入に対してどのような不安や、それに対する支援があるのかを知るために文献検索を行い、今後の血液透析導入患者へ

の看護に活かしていきたいと思い、この研究に取り組んだ。

II. 目的

本研究の目的は、血液透析を導入する患者の不安や、それに対する看護師の支援について明らかにすることである。

III. 事例紹介

A氏：20代。2013年より腎機能悪化があり、透析導入が必要と診断される。

医師よりA氏、家族へ透析についての説明あり。A氏からは「首に管を入れる時は痛くないですか。透析中は意識はありますか。」など不安に思っていることをいくつか質問され、医師から質問に対する追加説明を受けていた。透析は未知なことであり、透析室見学を行うことで透析のイメージがつくのではないかと考えた。また実際の様子を見学することで、新たな疑問や不安なことを表出でき、それに対応することにより、患者の理解が深まり安心も得られるのではないかと考えた。そこで患者に透析室見学を提案したところ、「ぜひ行ってみたいです。」と希望があったため、同日実施した。見学後は「安心しました。見学して、いろいろ教わることもできたし、親や兄弟も心配していたけれど、心配ないと私から説明できそうです。実際に見せ

てもらって話も聞いて本当に良かったです。ありがとうございます。」との言葉あり。翌日に透析カテーテル挿入し、透析導入となった。

IV. 方法

A氏に、透析室の見学後にアンケートを記入してもらい、それをもとに文献検討を行った。アンケートの内容は、①『「透析」を開始すると聞いた時に、どのように思いましたか。心配していたことは、どのような事でしたか。』②『実際に、透析室の見学に行くことで、感じたこと、改めてわかったことなどを教えてください。』の2点とした。

V. 倫理的配慮

対象者に、本研究の主旨と、研究へ参加しないことで不利益が生じないこと、個人が特定されないようにプライバシーを厳守することを口頭と文書で説明し同意を得た。

VI. 結果

【透析室見学の実際】

透析室の見学は、透析室の看護師に依頼し、患者に強い不安があることなど患者の状況が分かるように情報提供を行った。患者は透析室の看護師から、実際に透析の機械を見せてもらい透析の仕組みの説明や、実際の穿刺針を確認させてもらい挿入前に痛み止めを貼ることで穿刺痛が軽減できること、透析中の排泄に対する不安に対してはトイレが可能であること、水分や食事摂取も可能などの説明を受けた。見学中は不安に思うことを適宜質問し情報を得ることができた。

【アンケート結果】

①『「透析」を開始すると聞いた時に、どのように思いましたか。心配していたことは、どのような事でしたか。』

- ・まさか20代の自分が透析になんかなるわけない。
- ・機械によって体内の余分な水分や成分を抜くと聞いていたので、気分は悪くなるのかな、だるくなるのかな、体は耐えられるかなとたくさん不安や疑問が出てきた。
- ・知らないことだらけ、知りたいことだらけだっ

た私は自分の心の中だけでおさえる事はできませんでした。

- ・透析の際の体調の変化が心配。などがあつた。

②『実際に、透析室の見学に行くことで、感じたこと、改めてわかったことなどを教えてください。』

- ・最初に考えていた（透析の）イメージは静かな個室に患者さんがいて、ジーっと耐えて横になっているというイメージでした。しかし、実際行ってみると透析室の雰囲気はとても明るく、とても優しく接してくれました。実際にベッドで横になっている患者さんも看護師さん達と楽しく会話をしていました。
 - ・透析に対する恐怖心や不安がかなり減りました。
 - ・どういう手順で始まり終わるかまでも説明してくれたので、すごく気持ちがスッキリしました。
 - ・透析とだけ聞くと良いイメージは持てなかったのですが、見学してみると透析は決して怖いものではないということがわかりました。
 - ・これから実際に透析を始める方には私と同じように始める前に透析室に連れて行ってもらい、説明を受け、使う道具を見せてもらい実際にやっている方の話をきかせてもらうだけで恐怖心や不安はかなり減ると思います。
 - ・初めてやることを実際に先に見て、実際にその空気を先に感じることは治療が始まる患者さんの心の準備には大切だなととても思いました。
- などがあつた。

文献では透析導入に対する不安について、田中は「理不尽にも自分が透析患者になってしまったことや透析治療が一生続くこと、一日おきに繰り返される穿刺痛や不均衡症候群など身体的合併症に対して不安や葛藤」、¹⁾「透析治療に束縛され、それによって生かされることに対して不安や自由の喪失」²⁾ 中野らは「情報の過不足」²⁾ 田上らは「血液透析そのものに対する不安感、血液透析を受けなければ死んでしまうという死への恐怖感」³⁾と述べている。また、春木は「透析患者の不安は‘器械に支えられて生きる不安’、

‘死と隣り合わせ状況で生きる不安’が基本である」と述べており、透析患者の不安について、以下のようにあげている。

1. 経済的な、貧困への不安
2. 対人関係をめぐる不安
3. 業績、仕事に対する不安
4. 社会的役割をめぐる不安
5. 家庭での地位、役割の変化についての不安
6. 肉体的能力の低下、合併症への不安
7. 病気（透析患者として）の予後についての不安
8. 透析医療についての不安
9. 生死についての不安—どのくらい生きられるか、もしかしたらまもなく死ぬのでは⁴⁾

などがあった。

VII. 考察

透析導入時の不安として、田中は「透析期患者の身体的苦痛として、頭痛や嘔気、強い倦怠感などを伴う不均衡症候群や、穿刺による苦痛⁵⁾があると述べている。A氏のアンケートからも「気分は悪くなるのか。」「だるくなるのか。」「体は耐えられるか。」「透析の際の体調の変化が心配。」とあるように、A氏も導入に対し身体面での不安があったと考えられ、導入前では透析の際の体調変化や、穿刺痛への不安があることがわかる。不安の原因として、情報の過不足があり、透析に対して情報が無いことや、逆に不均衡症候群や透析によって起こる合併症などを知っていることで不安を増強させる可能性がある。

不安に対して、田中は「まずは患者が抱えている怒りや悲観、不条理な思いを患者自身が語れる環境を整えること」「患者の語った思いや気持ちを否定せず、ありのままを受け入れ、患者自身が自尊心を回復し、孤立感や孤独感を軽減できるよう支援する⁶⁾」ことが重要と述べている。文献からも透析導入時には身体的苦痛だけではなく、死への恐怖や、経済的・社会的な不安があることがわかる。A氏は20代であり生涯透析を続けなければならないことへの不安も大きかったと考えられる。A氏に限らず、週3回透析に通わなくてはならない事で、家族の協力が必要となったり、仕事に制限がかかってしま

い、経済的不安が生じる。そのため、透析導入患者の社会的背景を考慮し、どのような不安があるのか患者の思いを傾聴し関わっていくことが大切である。

中野らは「透析導入前から「見る・聞く・触る」などの疑似体験は、透析療法への不安の軽減や、ポジティブなイメージづくりにつながるといえる。」⁷⁾と述べている。A氏の透析室見学後のアンケートでは、「透析に対する恐怖心や不安がかなり減りました。」「初めてやることを実際に先に見て、実際にその空気を先に感じることは治療が始まる患者さんの心の準備には大切。」とあるように、透析室の見学を行い、実際の穿刺針を見たり透析の様子を知ることができたこと、質問し、聞きたい情報を得ることができたことで、透析への不安が軽減されたと考える。また、見学前には「知らないことだらけ、知りたいことだらけ。」と、情報が不足していることでの不安があったが、透析室を見学したことで透析のイメージができ、透析室の見学は有効であったと考えられる。

今後、血液透析導入患者の情報を透析室の看護師と共有し、不安が軽減され安心して透析が導入出来るように、透析室見学を取り入れていく必要があると考える。

VIII. 結論

透析導入時の不安として、透析の際の体調の変化、穿刺痛などがある。

不安の原因として情報の過不足があり、透析室の見学をする事で情報を得る事ができ、不安が軽減される。また、不安に対して、患者の思いを傾聴していく関わりが大切である。

引用文献

- 1) 5) 6) 田中順也：導入期の不安,透析ケア, 17 (5), 42-43, 2011.
- 2) 7) 中野聡子, 杉田容子, 黒田和子：透析導入に向き合う患者と家族の思い—透析導入経験を振り返って—, 看護実践の科学, 33 (3), 75-76, 2008.
- 3) 田上功, 渡曾丹和子：血液透析療法を受ける患者の心理的特徴に関する研究の分析, 医療保健学研究 2号, 180, 2011.
- 4) 春木繁一：透析患者のサイコネフロジー

一透析導入の告知に伴って生まれる患者の
心理, いかにして受け入れていくか, その

他の心理的問題一, 日本臨牀 62巻, 増刊
号6, 542, 2004.